

「教育実習体験レポート」

[公立高等学校 数学]

教育実習では、主に授業の準備と生徒との接し方に苦労した。

まず、授業の準備については、ある程度の指導案や板書計画は事前に準備していたものの、いざ実習が始まって先生方の授業を見てみると、自分が準備していた授業の展開の仕方では不十分な点が多すぎることに気付き、先生方の授業を参考にもう一度指導案や板書計画を練り直していると、最終的には全く違うものになっており、それだけの大きな修正をするに当たってやはり大量の時間が必要であり、非常に苦労した。また、毎回授業をさせて頂く度に教科指導の先生から、たくさんのアドバイスを頂き、それを踏まえて更に修正を加え、毎回何度も修正を重ねて授業に挑んでいたため、いくら時間があっても足りないというのが正直な思いであった。そして、そのような時間的な問題だけでなく、分かりやすい授業をするために先生方は授業の進め方や板書の書き方、解説の仕方、発問の仕方など様々な点で、細かいところまで様々な配慮をされており、いくら私が生徒の立場に立って「分かりやすい授業とはどういうものか」ということを考えようと心掛けていても、そのような先生方の細かな配慮には到底及ばず、自分自身の無力さを痛感するばかりであった。

また、生徒との関わりの面では、生徒と話すことというと、すごく簡単なことで、特に教育実習生ということで、先生方よりも生徒と年齢が近いこともあり、よりフランクに話せるのではないかというイメージがあったが、実際はその真逆で、約半年近く生活を共にしてきた担任の先生と、初めて顔を合わせた私とでは挨拶ひとつにしても生徒の反応が全然違い、非常に戸惑った。そのような戸惑いの中で、初めは生徒とどのように関われば良いのか分からず、このまま2週間が終わってしまうのではないかと不安を感じることもあったが、担当クラスの生徒の顔と名前を覚え、朝や帰りの際に一人ひとりに挨拶をしたり、授業前に早めに教室に行き、休み時間に積極的に話しかけたりすることを心掛け、少しずつ生徒との距離を縮められるよう努めた。そのようなことを心掛けていると、3日目頃から徐々に生徒から話しかけてくれるようになったり、授業の質問をしてくれるようになったりと、生徒との距離感が縮まっていることを実感でき、非常に嬉しかった。

特に、初めは私が授業をしていても、その授業中に分からないことがあれば、生徒は全て私ではなく教科指導の先生に質問をしていたのに、徐々に「先生、今日の授業の質問いいですか。」と授業終わりに、教科指導の先生ではなく私に質問を持ってきてくれるようになった時は、私のことを少しでも先生として認めてくれるようになったのかなと感じることができ、非常に嬉しかった。

「先生の授業がすごく分かりやすかった」、「〇〇先生（教科指導の先生）顔負けの分かりやすい授業でした。」「いつも話しかけてくれて嬉しかったです。」「毎日僕の名前を優しく呼んでくれて嬉しかったです。」など、生徒からのたくさんの嬉しいメッセージを最終日にもらった。授業の準備や生徒との関わりに辛さを感じることもあったが、生徒のために良い授業をしよう、生徒と少しでも距離を縮めようと考えて取り組んできたことのどれも無駄ではなく、しっかりと生徒にも伝わっていたのだと感じることができ、思わず涙を流してしまった。

もちろん辛いこと、大変なこともあったが、それ以上に生徒との関わりの中で、楽しさを感じる毎日であり、辛かったことを忘れてしまうほど嬉しいことがたくさんあった。

また、先生方から学ぶこと、感じるものがたくさんあった。やはり、私が生徒として授業を受けていた

時とは見えてくるものや感じるものが全然違い、たった1問を解説するためにその何倍もの時間を掛けて準備をする必要があり、授業の進め方や板書の書き方、解説の仕方、発問の仕方など、授業中の一つひとつの動作の中に、生徒が分かりやすいように、誤解を生まないようにと様々な配慮がなされていた。その中で、先生方の授業に対する熱い思いを感じ、授業における技術はもちろんのこと、入念な準備、豊富な知識の必要性を学ぶことが出来た。

また、自分が実際に教壇に立ってみることで、授業中に発する言葉の責任の重さを強く感じた。もし私が授業中に間違えたことを言ってしまったら、そのまま間違いに気付かない状態で受験当日を迎える可能性も少なからずあると思うと、授業中に発する一言の重みをすごく感じた。その責任の大きさを体感し、授業をすることが恐くなってしまったりもしたが、より強い責任感の元、気を引き締めて教材研究や授業に臨むことが出来たので、私にとっては非常に良い気付きであったと感じている。

そして、何よりも、この教育実習で教員という職の尊さを絶えず感じる事が出来た。実際に、生徒と関わる中で、文化祭に向けて一生懸命準備をしている姿、部活動を頑張っている姿、そのひとつひとつに元気付けられ、それが私の大きな活力になっていた。そのように、生徒の貴重な高校生活の時間を傍で見守り、自分の将来に向けて努力するサポートをし、それだけでなく自分自身も生徒から元気を与えられるということを間近で見て、感じることで、実習に行く前にイメージしていた何倍も教員という職が尊いものであると気付くことが出来た。

そのように、教育実習では、先生方からだけではなく、生徒からもたくさんの学びや気付きを与えられ、本当に充実した有意義な時間であり、「大学の中には学ぶことが出来ないことをたくさん学ばせて頂いたな」と、教育実習の意義を再確認することができた。これらの学びは、教職という範囲に留まらず、今後の人生の中で活かしていける部分が大いにあると感じている。